
スピリチュアル・ワーカーズ

誇大紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スピリチュアル・ワークス

【Nコード】

N3287L

【作者名】

誇大紫

【あらすじ】

奇妙な力を持つ人々の生き様を一話完結でどうぞ。 掌編集。

セキソチ力を夢に求めて

「夢の青闇」と呼ばれる者の話をしようか。

白髪が点々と混じった初老の紳士がドアをノックする。数秒待ち、配膳車を押して入っていく。部屋のベッドには肉の塊があった。

と、塊はもぞもぞ動き出す。それは太った女、鬼戸ザクロだった。匂いと音で目を覚ましたザクロは、起きるなり大声で叫んだ。

「マニフィカ、メシはどこなの！」

呼ばれた男は、既にトリプルチーズピザやカンパチスシやエビカレーやフカヒレあんかけチャーハンやガーリックソースステーキや蟹玉スープを用意していた。

体重四五三キロで贅肉だらけのザクロは、ベッドから一步も動けない。マニフィカはその口に料理を運んでいくが、ぼろぼろと肉片が口から零れている。

「お土産は」

スーツに身を包んだマニフィカは、張り付けたような笑顔で話しかける。ザクロは無言でベッドの下を指す。そこにはタコやらエビやらが絡まって蠢いている。

「魚介類ですか」

「シーフードだった」

ぐちゃぐちゃと噛み潰しながら言う。

マニフィカの顔に陰がさした。

鬼戸ザクロは現在、睡眠時間が一日二二時間以上。起きている間はひたすら喰い続ける脂肪の塊。毎日、目覚めるときに夢の世界から何か一つ現実世界に持ってきてしまう。空想の産物だろうが鉱物だろうが何でもありだった。ただ、場末の駄菓子屋にあるガチャガ

チャと同レベルで何が出るかわからないのだった。

……何もしなければの話だが。

「失礼します。いつもの説明に移ります」

一通り喰い終わるのを見て、マニフィカはビデオを流し出した。さらに枕の下から写真を取り出した。

くりくりした目とクセのある金髪美少女の写真とビデオだった。写真は、困った顔でソファに横になっている少女は無防備な魅力を醸し出している。

「私の娘、セキゾチカは指を舐める癖がなかなか直らず——ゾウさんが好きだがキリンさんはもっと好きで——妻に似て人見知りで——妻と一緒に事故で死に——」

説明は小一時間にも及び、ザクロは神妙な顔つきで聞いていた。「今度こそ持つてくるわよ。娘さんを迎える用意しときなさいよ。さ、いつもの」

マニフィカはザクロの瞳を見つめると、一定のリズムで床を踏みつつ話しかける。

「もう外が暗いですね」

「うん」

コツ、コツ……。

「早く眠らなくちゃ。ですよね？」

「うん」

コツ、コツ……。

「満腹だからあなたは眠い？」

「うん」

コツ、コツ……。

「眠いな。眠い。眠くなってくる。さあお眠り」

ある日のこと、目が覚めたザクロは傍にいた金髪少女を見て声を

あげた。

「セキゾチカだわ!」

マニフィカは部屋に駆け込み、少女を抱きしめた。彼女は呆然とした瞳でなすがままである。

「お父様、私……」

「いいんだ。生きているだけでいいんだよ」

ザクロは得意げな顔で見つめていた。マニフィカは娘を外に出し、ザクロに話しかける。

「ありがとうございます」

彼女は頬の肉を震わせて笑った。

コツ、コツ……。

「もうマニフィカはいなくなりますよね?」

「うん」

コツ、コツ……。

「いなくなったら自分の世話をする人がいなくなるね?」

「うん」

コツ、コツ……。

「それじゃあ、セキゾチカが出てこなかったことにしたらどうかな? いいと思わないかい」

「うん」

コツ、コツ……。

「セキゾチカは出なかった。マニフィカはずっと傍にいる。マニフィカと自分はずっとセキゾチカを探し続けるんだ」

「うん」

ぱんつ。

手を叩くと、ザクロは目を覚ました。マニフィカはニッコリ微笑む。

「ごはんの時間ですよ。セキゾチカ、今回も見つかりませんでしたか?」

食事を終え、マニフィカはいつものようにザクロが眠るのを見届けると、コートを着て帰宅する。

「お帰りなさい、お父様！」

数十人の金髪美少女、セキゾチカが出迎え、彼に群がった。彼は娘に囲まれ、幸せだった。

これからもセキゾチカを集めようと決心した。

アメリカンショートヘアとメランコリック毒チワワ

「サイキック・サイコ」と呼ばれる者の話をしようか。

チワワみたいな女だった。小さな体でぴょんぴょん動き、どうかすると目がぼろんとこぼれ落ちるんじゃないかって不安になるような大きな瞳。

初めて見た時は泣いていたせいか、濡れた黒真珠みたいだった。いやマジに。

ぶらり入ると、酒場はくだらない噂話で持ち切りだった。ここんどこ強盗が起きまくってるから警備が強化されるとか街のギャング一味がボスを除いて全員自殺したとか「毒ガス」と呼ばれる毒ガスではない兵器とか。

カウンターにはチャイニーズ系の女が突っ伏していた。泣いていた彼女は、どうやら家を飛び出てきたらしかった。どう見ても十代前半だがウエイターが持て余し気味にしている。

何で未成年を入店させてんだよ。

襲われるぞ。

俺に。

「なあジャムコーク」

奴が目で「どうにかしろ」って合図しやがったから、俺は肩をすくめて首を振る。するとムツとして、レジの脇に貼られた俺のツケた金額を指さした。

「よう、どうしたんだぜフロイライン（お嬢さん）？」

返事はない。

「ちよいとこのオッサンに話しちゃくれねえかな」

俺はホットミルクを頼み、彼女の頭を撫でる。しかしすぐに跳ね

退けられた。

「触らないでよこのイカレ下半身男」

この時点では、俺はまだ自分のロリコン趣味がバレてないと思っ
てた。

「なんだよ、元気じゃねえか」

「いいから放つといて。ああもうなんでこんな男ばっかり……」

酒場の男たちがビール瓶で一斉に自分の頭を叩きだした。壁に向
かって頭突きするのもある。

「おいおい、お前らただでさえ冴えない頭を余計にバカにしてどう
すんだぜ」

半笑いで言ったが、真面目なウェイターまでウイスキーを二本も
三本も一気飲みしだして、俺はようやくおかしいと思います。

「やめろつて！」

男たちから割れた瓶を取り上げていく。

と、新しい革靴にぽたりと血が落ちた。ふざけんなよ。一体誰の
……。

血が落ちたのは手首からだった。俺の右手は瓶の破片を使い、左
手首を切っていた。

「だッ、誰のだつてエエーッ！」

俺はすぐにテーブルクロスを破いて傷口に当て、圧迫する。店内
を見回す。あの女もミルクで睡眠薬を大量に飲み出していた。

「おい、やめろ」

細い腕を掴みあげると、カプセルがバラバラと床にこぼれた。

「だつて……」

俺はその時初めて女の顔を見た。最高級黒真珠が二つ。一秒で気
になって二秒で恋に落ちた。女は啞然とした表情になり、頬を染め
た。

出血が止まり自殺騒ぎが止み、俺は女の手を引いて酒場を出た。

「ハァーイ。ジャムコーク、大きいのブツ放したくなあい？」

海沿いの街灯下を行くと、胸の開けた女どもが群がって俺のケツを触りに来る。キュツと引き締まった俺の尻は大人気だ。

「今、ガキのお守り中だね。大人の時間は見せないでやってくれ」
ガキは腕を強く引つ張った。俺は女どもに手を振って駐車場に向かう。

俺たちはオープンカーで街を駆ける。夜風が女の黒い髪を乱れさせるのを見て俺はひどく興奮した。

「さっきの、娼婦でしょ」

「ああ、よくわかったな。花マルをやるう」
睨むな。冗談だつて。

「ああいう人達つて、なんでわざわざああいう仕事やるのかしら。全然わかんないわ」

ネオンライトに光る街を見て、助手席の女は頬杖をついた。

「じゃあお前はこういう仕事してんだ」

「私？ 働いてないわ。たいてい閉じ込められて暮らしてたから」
ならあいつらのこと、何も言う資格はないぜ。仕事なんて向き不向きと運と不運と好きと嫌いがゴチャゴチャに入り交じってやってんだから……と思ったが言う必要はないか。

「ふうん」

女は俺を見て意味深に頷く。

「閉じ込められてたつて、お前は姫か何かか」

途端に弾けるように笑った。だがどこか陰鬱な響きを持った笑い声だ。

「姫は周りの人を自殺させたりしないでしょ」

「やっぱりお前の仕事か。」

「お前つて呼ばないで。私はトコ。やまいの病乃トコ」

「チャイニーズだな。」

「アイムジャパニーズ！ アメリカンつてこれだから嫌い。自分以外の国の文化に興味ないんだもん」

「トコ、お前さっきから俺の心読んでるだろ」

トコはハッとして黙った。目を逸らして外を見る。

「テレパシーか。周りを自殺させてるのもその力なのか」

「そう。私、鬱病で。あなたにわかるかしら、鬱って」

「日本人の国民病だろ」

にんまりと口を綻ばせ、上目がちに俺を見た。

「わかつてるじゃない。A++をあげるわ」

嬉しいね、今なら突っ込んで五秒で大爆発だぜ。

「私って何かの拍子に——スイッチが入るみたいに鬱になるのよね」
俺はウインカーを出して右折する。チツカチツカと手元でリズムが刻まれた。

「あんまり強い感情だとテレパシーも制限きかないの。すごく落ち込んだ時は、周りの人を敵味方全員巻き込んで自殺させる毒ガスみたいなものになっちゃう。私は本当にダメで今まで何人殺したのかその中には小さい子とかもいたし自爆した軍人は関係ない人まで一緒に死んだしそれが全部私のせいだって仕方ないんだけど涙が出て優しい人なんていないし誰も見向きもしないしフラッシュバックは七十二種類あるしテレパシーなんていらない必要ないまだのうと生きてる私は今すぐに——」

気づくとトコの言葉に比例するように俺は強くアクセルを踏みこんでいて、既に百二十キロオーバーだった。

俺は無意識に死のうとしていた。道路の先に赤信号が見える。先は交差点で左右に車が行き来する。足はアクセルを弱める気配はない。

「なあ。自殺する奴って、周りの迷惑を省みないよな。俺、自殺する奴は馬鹿だと思うんだが。半径一インチくらいの価値観で自分ほどカワイソウな人間はいないって断定してるし皆それに同情してカワイソウって言いやがるから奴らつけあがってんだよ」

トコの顔が歪む。更に加速、車は死へ猛スピードで向かう。風景の色が混ざって曖昧に後ろへ消えていく。

言葉とは裏腹に俺は自分の過去と今を未来を考えてもうマジに死

にたくなっている。でも俺は生粋の皮肉屋だから、言葉だけはふざけてられる。

「でもよ、お前はそのテレパシーが嫌いかもしれんが、俺は結構好きだぜ」

「嘘よ」

「心を読めよ」

運転から手が離せないが、気配でトコが俺を見ているのがわかった。スピードが若干緩まる。赤信号に間に合うか。

「お前の気持ち次第で自殺者が出るんなら、その逆もありなんじゃねえの。強いハッピーを伝染させられる。空の上から愛の種を撒き散らしてこの地球から悲しみを消すエンジェルだ」

トコは首を振る。俺はその仕種も好きだ。

「無理だわ」

俺は片手でトコの手をとる。なんて小さくて冷たい手だ。俺が温めてやりたい。

「無理じゃない。好きだぜ、マイエンジェル」

車は急ブレーキをかけ、赤信号手前で止まった。死にたい気分は止んでいた。

「俺がトコをハッピーにしてやる。トコとハッピーの間に髪の毛一本入り込めないように」

トコは大声で笑い出した。そこには陰鬱な響きはもうなかった。俺はハイになって赤信号にも関わらず自分の意志でアクセル全開、飛び出していく。

「俺がどんだけ世の中が楽しいか教えてやるよ！」

かくして「毒ガス」と呼ばれた女はエンジェルに生まれ変わったってわけだ。

……まあ、飛び出した瞬間ポリ公に引っ掛かって嚴重注意されたがな。トコはそれを見て腹を抱えてゲラゲラ笑ってやがった。

雑踏にいたもの

「地下街の埒外」と呼ばれる者の話をしようか。

イ又は人間には聞こえない音まで拾う。ぼくはそれを初めて知った。黒っぽい表紙の図鑑に書いてあったのだ。

動物には可聴域というのがあって、それが広いか狭いかによってどんな音を聞き取れるかが決まっている。聞くことができるかどうかは別にして、実はヒトは日常生活で様々な音を浴びているのだ。「もしもそこに……」

それを読んだとき、ぼくの足は家を出て地下街へと急いでいた。急にあの時のことがわかったような気がしたのだ。

小学生の時、その地下街には近寄るなど言われていた。大雨で滝のような水が流れ込み、溺死した人がいたのだ。

それでもぼくは学校帰りによく行った。大好きな少年がそこに住んでいたから。余計な筋肉も脂肪もない細身。セーラー服に、常にいかついヘッドフォンを着けた出で立ち。今ならそれなりに人気が出たに違いない。

彼の占いは評判だった。ぼくらは主に筆談で会話した。下手な字で他愛もない質問を渡すと、彼は真剣な眼差しでヘッドフォンを外す。その時、ぼくは余計な物音を立ててはいけなかった。

彼は地下街の雑踏に耳を傾ける。目を閉じ、座禅を組むように。スカートの端から覗く膝は白く、ぼくは骨のようだと思う。

同じように座禅をやってみたけれど、ぼくは結局一度も成功しなかった。五分ほどして、彼は穏やかな顔で答えを書く。

「生まれるのは二匹。オスとメスだ」

隣の奥さんが妊娠した。男か女か。そういう質問だった。もちろん

ん当たった。

ある時、ぼくは「どうしていつもヘッドフォンをつけてるの」と聞いた。ヘッドフォンには何も曲は流れていなかったのだ。

彼は長々と書き、紙を捨て、再び考えて書いた。

「君の部屋にある、大きな音を出すものから順に消してごらん。テレビを消すと、時計の音が浮かび上がる。それを止めると冷蔵庫の音が浮かぶ。そうやって繰り返ししていくと、小さな小さな音になる。続けていくとね、やがてそれが果たして本当に聞こえているのか、自分の幻聴なのか区別がつかなくなるんだ。それでも繰り返しすると……こうなってしまうんだ。話し相手の上唇と下唇が擦れる微かな音。ごみ箱で紙屑がきしむ音。蠅が餌を舐める音。細胞の入れ代わる音。菌が増える音。そんなのが聞ける。でも四六時中聞こえてると、うるさいだろう？ だからヘッドフォンをしてるんだ」

当時のぼくにはよくわからなかったけれど、彼の聞いている世界は全然違っただってことはわかった。

それからしばらくして彼の元へ行くと、占いをやめていた。階段裏の小さな扉は、無数の貼紙で隙間なくびっしりと埋めつくされていた。貼紙は様々な言葉で書かれていたが、その中の一枚だけぼくには読めた。

「静かにしてくれ」

彼はたった一人で倉庫奥へ閉じこもり、毛布にまみれて震えていた。頭が肥大化したような奇妙なシルエット。周囲には耳栓の空き箱が散乱している。

ぼくが近づいても気づかなかった。肩を叩くと、びっくりとして振り返った。目の下に酷いクマができていた。痩せこけた頬に、赤茶けた肌。目の焦点がなかなか合わない。執拗にガムテープで頭をグルグル巻いてヘッドフォンを固定し、その上にタオルを巻いている。もはや別人だった。

「どうしたの。占いしないの？」

紙に書いて渡した。彼は震える指先で受け取り、長い時間をかけ

て返事を書いた。ミミズがのたうちまわったような字だった。

「何かと何かの交差したもののから得る。僕の占いはそういうやり方だったんだ。雑踏からたくさんの音を聞き取ったら、そこから偶然組み合わせられた答えが聞こえる。一度そう聞けると、もうそうとしか聞こえない。君にもあるだろう、そういう空耳が。僕は聞いてしまったんだよ。雑踏から浮かび上がる奴の声を。それからはどこにいても、何を聞いてもそいつの唸り声にしか聞こえないんだ」

彼はそう書いた。ぼくには何のことかさっぱりわからなかった。

この世とあの世の交差した場所に生きていた彼。神秘的な彼。

彼は何を聞いたのだろう。不思議に思ったはずなのに、今の今まで忘れていた。

彼はどうなったのだろう。ぼくは地下街へ続く階段を下りていく。石畳に足音がコツコツと響く。連休前の夕方、行き交う人々は楽しそうに笑う。

倉庫の扉を開ける。彼はまだそこにいた。雑多な掃除用具やゴミに埋もれたセーラー服男。彼の頭にヘッドフォンが無いのは、大事な部品の欠けた人形のように思えた。

声をかけるが返事はない。

「お前、そいつを知ってるのか」

振り向くと、悪臭を放つ小男がいた。ボロ切れを身にまとい、齒は黄色く染まっている。

「そいつ、頭がおかしくなってるんだぜ」

彼は自分で耳に割り箸を突っ込んで掻き混ぜたとの話だった。鼓膜を破ってしまったのだと。直後の表情は今まで見たことのないほど安らかだった。しかし、彼の表情はまた歪んだ。

「どうしてまだ聞こえる……どこからの音なんだ」

その言葉を最後に、彼は心を病んでしまったのだという。今、目の前にいる彼はよだれを垂らし、幸せそうな表情でいる。

話を教えてくれた男が彼を蹴飛ばした。ぼくは睨みつけたが、そいつは笑いながら去っていった。

コツコツ。

彼が壁を叩き、陶醉した様子で「いあ……いあ……」と呟いた。
どこか名状しがたい儀式めいた様子で「何か」を呼んでいる。ぼく
はその名前を聞いてしまう。

扉の外から、音たちがじわじわ染み込んでくる。背中越しに、ま
るで無数の触手が絡み付くように。

聞こえる。

遠い喧嘩の怒声。

革靴の足音。

膨らんだガムが破裂する。

誰かのくしゃみ。

ジーンズにシャツが擦れる。

蜜柑の皮に指を挿し込む。

死んだ蚊が石畳に落ちた。

どんどん近づいてくる。

腕時計の針がうるさい。

血管が収縮する音。

ぼくの脳から音がする。

シナプス信号の音がする。

「何か」の唸り声。

ぼくは耳栓を持ってこなかったことを後悔していた。

柔道の精

「ただの柔道家」と呼ばれる者の話をしようか。

——柔道で最強になる人には妖精が見えます。それは微かに移ろいたゆたう幻ですし、ほとんどの人には見えませんが、確かにそこにいます。

真由は礼をして一歩前に出る。

「よし。次、背負い打ち込み！」

ベリーショートの首筋に汗がたまり、やがて一筋の線になって流れていく。柔道着の下シャツは張り付き、褐色の肌が透けて見える。

「五十九、六十ッ！」

素早く相手の懐に入り、腰を跳ね上げて畳に大男をたたき付けた。

部活が終わり、他の男子メンバーが詰め襟に着替えたあと、真由は静かに更衣室に入った。

しばらくして出てきた姿はジャージだった。

大きな鞆とセーラーの入ったスポーツバッグを抱え、中学校を出て二駅離れた家まで走って帰る。

「……………」

呼吸音だけが夜闇に消えていく。単調なステップが、記憶の底に眠る憧れの人を呼び起こす……。

それは真由がまだ幼稚園の頃。母親についていった銀行で強盗事件に巻き込まれた。

真由は待合席に座り、チュッパチャップスを舐めていた。金髪の警備員となんとなく目が合い、につこりと笑いかけられ真由は俯く。そこへマトリックスのような黒のロングコートを着た人間が入ってきて受付嬢に包丁を突き付けたのだ。

「お金を出して下さい」

袖から出た枯木のような腕はふるふる震えていた。声が小さく、ごった返した人込みのせいで誰も気付かない。

「そちらの席で少々お待ち下さい」

落ち着いた受付嬢にそう言われ、強盗は素直に席——真由の隣に座った。

真由はじつと顔を覗きこんだが、強盗は隠すばかり。

さっきの警備員が背後から突然飛び掛かった。しかし、次の瞬間彼は投げ飛ばされていた。

「やる気かね」

強盗は邪魔だとばかりにコートを脱いだ。その下にいたのは、おじいさんだった。やせ細っているが、何度も何度も警備員はポンポン投げ飛ばされる。

真由はそれに見とれて、投げ飛ばすたびに拍手していた。

しかし結局、警察官がやってきて銃を出されあっさり御用となった。

手錠をかけられた強盗は、連れられながら真由に囁いた。

「ここにいる人間の中で、誰が真に強いと思うかね」

真由は指差す。

「わしじゃない。それはお嬢ちゃんだ。あんた以外みんな逃げたんだ。あんたは混じり気のない憧れがある。強さへの。あんたは誰よりも強くなるよ」

家に帰った真由は、母親が用意したトンカツと飯とキャベツと味噌汁と生玉子を混ぜてガツガツ食う。

兄がため息を吐いた。

「お前な、いい加減にしろよ。そんな食い方する奴見たことないぞ。汗臭えし」

三杯おかわりして兄貴とカツを取り合った。真由は笑っていた。シャワーを浴び、部屋に帰ってベッドに倒れこんだ。

「選ばれし者よ……」

真由のそばに三十センチほどの女の子が現れた。ドレスを着て羽が生えている。

妖精だ。

だが真由は答えない。妖精は仕切り直した。

「コホン、選ばれし者よ……」

——ぐごごごおおおお。

「イビキをかくなっ！」

妖精が両手で左の頬をつねると、真由はやっと起きた。

「何。え、何……？」

妖精は恭しくお辞儀をする。

「私はヤワラ、最強の柔道家になる者の前にだけ現れる柔道の精」
「それで？」

寝はじめを起こされた真由は不機嫌そうだ。

「私がいれば、世界一は約束されたも同然。今まで緩くやってたかもしれないけど、ビシビシいくわよ」

——グシャッ！

真由は妖精を握り潰した。しかし手を開くとそこには何もない。

「怖っ。いきなり何よ」妖精はいつの間にか頭の後ろにいた。「妖精の力をあげようっていうのに」

真由は頭をボリボリ掻く。

「いない。私、一人でやる。誰かの力を借りると、自分でやり遂げたっていう自信がなくなるから」

妖精は不思議そうに、彼女の瞳を見つめた。それから呆れたように言った。

「こういうタイプは初めてね。でも、まだ甘いんじゃないの。いつかこう思う時が来るわよ。『あの時、妖精の力を借りてれば負けなかったのに』って」

「そう思う奴は、世界一になんてなれないよ」

妖精は目を見開いた。胸に手を当て、鼓動が高くなるのを感じた。「勝つためにはなんだってやる。ルールの範囲内で。妖精の力はルールの範囲外だしね」

妖精は笑いだしたくなる自分に気づいた。

「ねえ、じゃあ力は貸さないけど見てるだけならいい？ 私、あなたがどこまで行くか見ていたくなつたの」

「じゃあ、友達になろう」

それはいいの、と妖精は上目使いに尋ねる。

「友達はルールと関係ないじゃん」

真由は呟き、また寝はじめた。妖精はその枕元で横になってすやすや眠った。

ここにだよここにいるよここにきて

「ウェブ風水師」と呼ばれる者の話をしようか。

ある女子高生の日常ブログがある。

投稿された最新の記事には、無視、男、浮気、首、女、妊娠、退学、墮胎、恐怖症、殺害、睡眠不足、手首、霊、占い、前世、運命、呪い、風水などの単語が混じる。

傍で大きな瞳をした三頭身のアバターが「あいねだよっ」と白い歯を見せてニコニコ笑っていた。

PCのディスプレイ前では、ぼたりぼたりと黄色の滴が落ちていた。それは宙に揺れる足からだ。白い靴下はふくらはぎのラインを美しく強調しているが、黄色く染みができている。

太股の上には短くした制服のスカート。更に上がっていくと紫色に鬱血し、目の飛び出した頭があった。女は首を吊っていた。

大学生の咲也は携帯で自身の映画感想ブログを見て首を傾げている。昨日からブログにある様々なリンクが、ことごとく切れているのだ。

最新の記事「何故かリンクだけ繋がらないorz」には小さなコメントが二件ついていて、一つ目は知らない名前「あいね」のものだった。

ここにだよ

ここにいるよ

ここにきて

咲也は得体の知れないものがどこから自分を見ているような気がした。更にスクロールして下を見る。

ああ、呪われてますね……あなた、もうすぐ死にますよ。助かりたければ「ネットの吐き溜め」に連絡してください。

もう一件は辻ユキという名の者からだった。

「どうせ情報商材サイトだろ」

咲也は無視してコメントを削除した。

次の日、咲也は自分のブログに「何か」が起っていることだけはわかった。アクセス数が一気に莫大な数値になっていた。

最新記事へのコメントが138件ついており、その全てが「あいね」のものだった。

ここだよ

ここにいますよ

ここにきて

ここだよ

ここにいますよ

ここにきて

ここだよ

ここにいますよ

ここにきて

遙か下までスクロールしても文面は同じで名前も同じ。咲也は気味の悪い感情を消すため、「ネットの吐き溜め」を検索した。たど

り着いたサイトでは、黒地をバックに白抜きで「チェーンメール回収所」「ウェブ風水」とだけあるシンプルなものだった。

チェーンメール回収所を見たが、そこには送り先のアドレスと送られたチェーンメールをアップする掲示板しかなかった。「ウェブ風水」のページを見ると、テキストが並んでいた。

私はウェブ風水師の辻ユキです。あなたはブログをやっているでしょう。或はウェブサイト。或はミクシィ。或はツイッターを。もしあなたが明日死んだとして、それらはどうなると思いますか？ 一億総ネット時代に、残されたそれらはどうなるのでしょうか？ 呪われた人はここ（メールアドレス）に連絡してください。

怪しすぎたが、ここまできたら引き下がれなかった。咲也はフリーメールアドレスを新たに取得し、そこからメールを送った。すぐに返信が来た。

連絡ありがとうございます。

早速ですが説明を始めます。私は以前から、ウェブ風水という概念を提唱してきました。

ウェブ上には管理人が死を遂げてそのまま閉鎖されずに残っていたり、オカルトの儀式を行ったままだったり、怪談や心靈写真が集まっっていて「呪い」がたまっているサイトがあります。呪いが増えていくとその管理人に悪影響を及ぼすのです。

そういったサイトからあなたのサイトへリンクされると、そこから呪いがあなたの所へ流れていきます。ですが別に恐れることはありません。実はこれは常に起こっていることなのです。

普段は呪いのたまるサイトでも、たいていはリンク先が多いので拡散してたいした被害にはならず済みます。

問題は他のリンクが断ち切られた場合です。

呪いのたまったサイトがあなたのサイト以外の場所とのリンクを

全て断ち切ったら、その呪いの塊は唯一つ残ったリンクを辿っていきます。つまり、あなたのところへ。

あなたのサイトにリンクが大量にあればOKですが、リンクがないと呪いは出て行きません。

それから「サイトを閉鎖して消去すること」だけは絶対にやってはいけません！ それを行った者には呪いが具象化して、自殺者が多数出ています！

そこまで読んで、咲也は自サイトを確認する。使えるリンクは一件もない。更に「あいね」によるコメントは526件になっている。恐ろしくなった咲也は、急いでメールの続きを読む。

あなたの場合はリンクが役に立たないうえに、呪いの流れを誘導する言葉まで書きこまれています。よろしければあなたに協力して対処の方法をお教えしますが。経費として五万円を振り込んで頂ければ助かります。

咲也はメールで頼み、口座に言われた金額を振り込んだ。すぐに返信が来る。

ありがとうございます。先程、私はあなたのブログで新しいリンクを作成できるようにしました。前までのリンクは使えませんでした。あしからず。

さて、ここで対処ですが。あなたが助かるためには、てきとうちにそこからブログやサイトを見つけ出して、一方的にこちらからリンクを張れば良いのです。更に、そこに「あいね」と名乗って「ここだよここにいるよここにきて」と書いてください。

呪いが移っていきますので。

あなたがされたように。

ババを押し付けられたら、別の人に渡せばいいわけです。なに、

大丈夫ですよ。

その人だつてあなたと同じように、私に助けを求めてくるだけですから。

二重歩行者の見る世界

「下水道の白鰐」と呼ばれるものの話をしようか。

あたし死んじゃった。

お医者サマのがんばりもダメ、全然食べられなくなってやせ細って力が抜けていく。

あたし誰より不幸。

友達に借りてた本返せないしもう笑いあえない。死んだらあんまり好きでもなかったあの街に帰って、鉄塔の上から皆を見てあげる。それで夕陽を眺めたら天に昇る。ああ泣けてくる。見て。世界中の皆、あたしを見て。

あたし、なんてかわいそう。もう一回。あたし、なんてかわいそう。だから皆、あたしのために泣いて。

暗転して闇に溶け込んでいく。拍手のうねりがあたしを包んで興奮して汗が蒸発して頭が茹だってくる。観客は泣きながら一発痺れ総立ち。スティング・スタン・スタンディング・オベーション。

そうして舞台の幕が下りた。

帰り道には大量のインタビュアーとパパラッチと記者。そいつらの百連撃を東洋の格闘マスターみたいにサラリとかわして、私は家に着く。高層マンションの屋上に私の部屋はある。

鏡に向かって顎のラインを掻きむしる。幼い女の顔が壊れる。化粧なのか特殊メイクなのか判然としない皮がべりべりと一枚剥がれ、私は素颜になる。

それからまた顔にクリームを擦り込んで造型、シワやどんぐりまなこやヒゲを描きこむ。

「アンパンマン、新しい顔よ。ふふ」

いかにも腹を空かせてそんな男の面が完成して大満足。ようやくお腹が鳴る。私ってばいつも栄養失調でふらふらなのだ。

自己嫌悪統合失調性なんかとかかんとか。精神科はそう名付けたけど、実際のところよくわかってない。私は「誰か」にならないとご飯も食べられない。素顔では、大事なこと・他のことに優先順位をつけられない。区別できなくて集中できないのだ。

鏡に微笑んだら、中年のおじさんが笑いかえした。立ち上がってキッチンに向かう。

ガーリック・バター・パセリを混ぜてフランスパンの欠片に塗って適当にオーブンへ。アスパラガスとえのきをベーコンで巻いていると、パンが焼けて一つ口に放り込んだら赤ワインを煽ってキッチンドランカー。すりおろしたりんに漬けておいたラム肉をフライパンで熱い油を何度もかけて揚げるように焼く。串刺しにしたさっきのアスパラ達もそこに放り込んでまた赤ワインを煽る。サーモンを切ってレタスとタマネギのスライスにのせてオリーブオイルとシソとバルサミコ酢でカルパッチョ。鍋にトマト缶を開けて挽き肉と混ぜてスパゲティ投入。適当にチンした皮ごとポテトを揚げて塩胡椒。

私は破壊的なまでに執拗に料理を作り続け、それから全てをたいらげる。吐いてもとにかく口に入れて咀嚼する。何かから逃げるような咀嚼。

うまい。うまい？

おいしい。ほんとに？

食事が終わるとまた面を変えてトイレに行く。それからシャワーを浴びて寝る。

暗転して闇に溶け込んでいく。拍手のうねりが私を包んで興奮して汗が蒸発して頭が茹だってくる。観客は泣きながら一発痺れ総立ち。ステイキング・スタン・スタンディング・オベーション。

そうして舞台の幕が下りた。

どこからが始まりかわからない夢から覚める。私は女優なのか女優じゃないのか。鏡に向かって突然、あいつに会いに行こうと思いつく。

裏通りのマンホールに立ってリズミカルに足踏みする。金属音は響いてミナゴのところへと伝わる。すぐにズリリ、とマンホールが動いて顔を出した。

鰐淵ミナゴ。下水道に住む、私の幼なじみ。真っ黒い身体は月明かりの下でも輪郭が掴めない。

「……誰」

ミナゴは生臭い息で尋ねた。舐めるような視線を感じる。

「顔や声まで私と同じ、服だけ違う。でもその服私も持っている。そんなことができるのは」

私は自分の名を告げる。

「久しぶり。元気だった？」

「久しぶり。元気だった」

ミナゴの案内に従って迷路のような下水道に行く。ちょっと見ない間に、ミナゴは全身に鱗が生えていた。私にも鱗ができる。

ドブネズミやゴキブリの這いまわる下水道に行く。暗闇ではどちらが聞いてどちらが答えているのかわからなくなってくる。

「痩せてない？　ちゃんと食べてる？　肉とか」

「痩せてない。ちゃんと食べてる。肉とか」

あまりの臭いに吐き気を堪えて進むと、ミナゴの部屋に着いた。滅多に人が来ない、地下の忘れ去られたシェルター。人間を感知して、電気が自動的についた。

中央には顔を叩き潰された女の死骸がある。腹は裂かれ、肋骨が見えている。新鮮な肉。奇妙なことに、私は死体を見ていると安心する。誰でもない肉塊になって、私と同レベルになっているから。明かりの下で見たミナゴは、口許が赤く染まっていた。食事中だったらしい。

「人間の味ってどんな？」

「美味しくはないけど、あんまり簡単にとれるから」

ミナゴはくすみのない笑顔で言った。ああ、私はこいつが好き。心からそう思う。全部知りたい。

「人間が嫌いだから食べるの」

「別に。たいていの動物は好きだよ。人間も猫も鯨も鳥も。食べるけど」

そっというのが好きだ。区別がないのが。

「私、ミナゴのことが好きだよ」

「私も私のこと好きだよ」

私はミナゴを捕まえて頭を壁にぐんぐん叩きつける。何か言ってるけど聞こえない。そのうち鈍い音がして首がおかしな方向に曲がる。顔を擦ると血が壁に残った。ミナゴはもう抵抗しなくなっていたので、解放する。

その途端に私はミナゴに全く同じように頭を壁に叩きつけられて顔を擦られる。騙された。私の意識は霧散する。

暗転して闇に溶け込んでいく。拍手のうねりが私を包んで興奮して汗が蒸発して頭が茹だってくる。観客は泣きながら一発痺れ総立ち。スティング・スタン・スタンディング・オベーション。

そっして舞台の幕が下りた。

どこからが始まりかわからない夢から覚める。

隣には新鮮な女の死骸がある。顔が潰れて誰かわからない。あるいは、それは私かもしれない。

「あたし死んじゃった」

私は部屋を出る。たった一人で下水道をさまよう。なんて清々しい気分。

さあ、新しい幕を上げよう。

廃墟の奥の白医者

「しろまほう使い」と呼ばれる者の話をしようか。

パフの街は一言で済ますとクソだ。てかそれ以下だ。

ガキがマシンガンで店を襲撃し、その落とし前に別のガキがそいつらを殺しに行く。

マリファナの売人は比較的優しい奴だが、そのバックにはポリスとグルになったギャングがいる。

女はキチンとしているがたいていそういうクソギャングとデキて逃避行の果てに心中する。俺達に明日はないってか。俺の姉もこのケース。

ジジババはたいてい熱病でおつ死ぬから、この町では分け隔てなく老若男女みんな死ぬし殺される。パフでなかなか殺されないのは医者だ。もちろん正規の医者はパフ町民とは関係を持ちたくないから、払えないほど法外な値段（というか通常料金）を要求するか、逃げちまう。そんな医者はギャングがすぐ殺す。

俺が言ってる医者は「しろまほう使い」のことだ。廃墟の奥に住んで何でも治しちまう医者。

ある日、姉が行方をくらました。俺は「妊娠でもして帰れねえんだろ」と笑っていた。姉はいつもどこぞの男と家を出ちゃあ、妊娠して帰ってきてカトリック崩れの父親に殴られることを繰り返してたからな。

俺はいつだって背中にガキ背負って、ぼんやりマリファナ吸ってたよ。ああ、コイツもそのうち他人にションベンかけまくる人生送るのかなあ、なんて。

ところが、姉を見た奴の話ではギャングのマカノと消えたらしか

った。マカノはヤバい奴で、そいつと一緒にいた女はそれから二度と姿を見ることはないって言われてた。

姉はその点、例外だった。犯され頭を割られ、町外れの沼に捨てられてたくらいで済んだからだ。姉を見つけたのは俺だった。姉はバカだ。でも姉だから仕方ない。助けたかった。

俺はザクロみたいにはづくり割れた姉の後頭部をガムテープでグルグル巻いて中身が出ないように塞いだ。背負って「しろまほう使い」のいる廃墟へ行った。

しろまほう使いは姉を見るとすぐにやってきた。

「お姉さんをそのイスへ」

イスなんてない。そこにはトラック用のタイヤが転がされているだけだ。

「その『イス』へ」

よく見ると立派なイスだった。俺は姉を座らせた。あうあう言いながらズルリと倒れる姉。

「治療を始めます。お姉さん、貴女はどうして死んだのですか」
ピク。

「姉はまだ生きて——」

「黙りなさい。お姉さんにカウンセリングしてんです」

そいつはウンザリするほど長い時間をかけて姉がケガした理由を尋ねた。

「違う違う、もっと根源的なところです。もっと大きな因果が働いています」

でも姉は口がきけるような状態じゃあない。

「アハハ！　じゃあそれで？」

しろまほう使いは一人で話し続け、姉はそいつの質問には何一つ答えられなかった。姉は既に手遅れで、全部無駄で、こんなところに連れてきた俺のせいだった。俺は外に出て、ギャングの手下をやつてる友達から銃を借りて帰ってきた。ブツ殺してやろうと思ったんだ。

「あんだ、久しぶり」

姉がけろりとした顔で迎えた。頭の傷も塞がって何もなかったようだった。

どうやったのか、しろまほう使いに聞いたが俺にはよくわからなかった。ケガした原因とやらを水で希釈して飲ませたんだと。

人間を取り巻く全ての病気と事象はその対処でなんとかなるらしい。病気状態の患者に、病気の原因を希釈して与えると抵抗力がついて治る、と。

今回は――父親が持っていたロザリオもどきだった。それを砕いて粉にして混ぜて百倍以上に水で希釈して飲ませたらしい。

説明されても意味がわからない。でも治る。それが「しろまほう」とそいつは言った。俺は姉と抱き合って喜びあった。金なんてないから俺はそいつを家に呼んで手製の晩メシを食わしてやった。それから姉のことを感謝した。

「別に。当然のことをしたまですよ」

「謙虚だな。そういえば親父、出て来ないな。アイサツぐらいしとけばいいのに」

姉が部屋に呼びに行った。

「あ、言い忘れてましたがお父さんも原因の一つだから『使わせて頂きました――』」

奥の部屋から姉の悲鳴が聞こえた。

「まあ、当然のことをしたまですけどね」

……しろまほう使いってのはこういう奴なんだ。

ブギー・アリスの死の伝説

「ブギー・アリス」と呼ばれる者の話をしようか。

ジョン・レノンがFBIにマークされていたのは有名な話である。熱狂的なファンを一千万人以上の単位で動かすことができ暴動を起こせるとされていたからだ。

同様に……というかそれより先に、約六十年前のアイドル「ブギー・アリス」(Boggy Alice)もFBIにマークされていたと言われている。

ファンの数は千人にも満たなかったし、本人はマリファナと乱交パーティーくらいしかやってないから町警察くらいのレベルだろう。しかし、イギリスの片田舎から発掘されたこの女性アイドルは一部の百人ほどに異常な人気を博した。地元ハロウィーンの赤い悪魔コスプレで叫びまくるという、今思えば時代が早過ぎるゴスロリパンキッシュなテイストだった。

当時の地元紙によると、ライブ中に豚を殺して血を浴びながら歌ったり(後日倫理的事を問い詰められたアリスは「ちゃんと皆に振る舞ったよ?」と返したらしい)、観客にゲロを撒き散らしたり(観客はたいへん喜んだらしい)、観客が投げるゴミやらビール瓶やらには絶対に当たらなかったり(中には銃で撃つ者も多かったが一発も当たらなかったらしい)……と、もはや伝説上の人物のようになっている。

有名な曲は「ドレスの下にトマトの破裂」(The explosion of the killer tomato)らしいが、音源を聞いた人は何故か皆そのレコードだのラジオだのを叩き割ってしまうので、残った音源はオークションで数千万を超える。

とは言っても、ブギー・アリスの曲が何故こんなに値段が高くなるかと言えば、とある事件があったからだ。

彼女は百人ほどの熱狂的なファンが持つてきてくれるもので生活していたわけだが、その代わりに歌と排泄物をプレゼントしていたらしい。もはや教祖的な「偶像」という元来の意味でのアイドルに近い存在になっていたから喜ばれた。

さてそんな彼女はある日妊娠する。そりゃ乱交パーティーしてたら孕むわけだが、大きくなったお腹を抱え、久しぶりに出てきたライブ。熱狂的なファンだけを百人呼んでいた。

ひとしきり歌ったあと、彼女は叫んだ。

アイドルはもうやめること、歌はもう歌わないこと、母親になること。

そして彼女はステージから、いつものように観客の群れに飛び込んだ。祝福するように歌声が響き、原始的熱狂的宗教的快樂の渦巻きに観客たちは飲み込まれていく。

朝になり観客たちが全員帰ったとき、そこに彼女の姿はなかった。マークしていたFBIの目の前で、行方不明になった。

ブギー・アリスの伝説はそこであっけなく終わった。

現在、オークションでは彼女の身体が細切れにされ数億の値段が付けられている。それは全九十九番にナンバリングされ、ホルマリオン漬けで眼球や髪の毛に至るまで売られている。

当時集まった百人は、どうやら彼女を百の部位に分けて聖遺物として拝んでいたらしい。しかし九十九番までで、彼女の身体は全て揃ってしまう。

残りの一番は？

……どこかでスクスク育っているのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3287/>

スピリチュアル・ワークス

2010年12月25日09時25分発行